



きらめく



熊本支援学校長だより R3. 2月号

2月も終わりに近づき、今年度も残り1ヶ月となりました。暖かい日も増え、春が近づいてきていると感じます。学校では、卒業に向けた取組も始まり、寂し思いもしますが、次への新しいスタートへの準備のときでもあります。卒業式は、今年度も来賓の方の参加はありませんが、在校生の一部はリモート参加しますので、みんなで思い出に残る卒業式にしたいと思います。

出水南小学校との交流

先月号でお知らせした出水南小学校との交流40周年記念パネルが完成し、2月16日(火)に出水南小学校とリモートでお披露目会をしました。今年度は手紙のやり取りやリモートの交流でしたが、一緒にゲームしたりダンスをしたりと楽しい交流を行うことができました。学校ホームページでも紹介していますので、ご覧ください。



この40年間に出水南小学校と様々な交流を行っています。教育実習生など学校を訪れた人が出水南小学校の出身者で、交流のことを話していただく機会も多いです。裏面は、出水中学校2年清塘麻央さんの作文「心の成長」です。令和2年度内閣府「心の輪を広げる体験作文」で中学校区分「優秀賞(内閣府特命担当大臣賞)」を受賞されました。

スマホに弱い大人の教科書

熊本県警察が、SNS等のインターネットによる非行や被害から子供を守るため、県や教育委員会の協力を得て、保護者向け啓発冊子「スマホに弱い大人の教科書」を製作されました。

第1章「デジタル社会に生まれた子供の現状」、第2章「どうすれば子供たちを守れるか?」、第3章「最新のスマホ事情」からなり、保護者の皆さんや実際の子供の生の声が掲載しており、警察官の経験を基に、とても分かりやすく説明してあります。是非ご覧いただきたいと思います。



学校運営協議会

今年度の学校運営協議会は、防災型から総合型にして会議を行っています。湧心館高等学校との合同の会を年2回、学校単独の会を年2回、計4回実施しています。3学期の湧心館高等学校との合同の会は、新型コロナウイルス感染予防のため書面開催とし、学校単独の会は2月19日(金)に実施しました。今後も新型コロナウイルス感染予防についての取組は継続していくと思いますが、近隣の学校、地域の皆さまとの連携の在り方を工夫していかなければならないと感じました。

「心の成長」 出水中学校2年清塘麻央さん

私には、知的障害のある兄がいる。兄は、とてもこだわりが強く、思い通りにいかないと大声を出して怒るため、家族はふり回されている。また、話すことができないため意思がよみとりにくい。夜は家中の電気を消して回るし、人の食べ物でも平気で奪い取る。そんな兄の行動に小学生になった頃の私は、強い違和感を感じ、次第に嫌悪感を覚えるようになった。そして、兄の存在をはずかしいと思ひ、兄とは関わらないようになんとなく避けていた。

私と兄は六歳差で、兄が中学生になる年に私は小学校に入学した。入学してすぐに兄の一学年下の六年生たちから、

「M君の妹でしょう？いいなあ。」

などと声をかけられた。また、兄の担任だった先生は、会うたびに、

「M君元気？」

と声をかけてくれた。私はてっきり、兄は小学校でも嫌がられる存在だったのだろうと思っていたが、とてもかわいがられて人気者だったことを知って驚いた。なぜだろうと考えても当時は全く分からなかった。

私が通った小学校は、隣接する熊本支援学校と創立以来四十年交流を続けている。四年生のときは毎週昼休みに支援学校を訪問し、障害のある子どもたちと遊具で遊んだり、ゲームをしたりして過ごした。支援学校には兄のような知的障害の子や、手足が不自由な子など様々な障害をもつ子がいるので、初めはどう接すればいいのか分からず戸惑っていたが、遊びを通して相手の性格を知ったり、不自由な体で懸命に頑張る姿を見たりするにつれ、交流が楽しみになり、心が通い合うようになった。障害のある子のお世話をする気持ちだったのが、普通の友達に会いに行く気持ちへと変化した。この交流を通して、相手を深く知ることで、障害者に対する違和感がなくなり、相手の健常者と違うところを見るのではなく、違いを受け止め、良い所をたくさん見つけられるようになった。私が一年生だったときの六年生がみんな兄のことを好きでいてくれたのは、支援学校での交流を通して障害者への偏見や差別の意識がなくなっていて、兄の良い面を知ってくれたからかもしれないと思う。そして、兄に偏見をもち、その存在をはずかしいと思っていた自分がはずかしくなった。

兄には、素直で優しいところや一つのこと集中できるなどの良いところがある。相変わらず嫌なこと、大変なことも多いが、兄は障害者になりたくてなったわけではないし、不自由を抱えながら懸命に生きているので、すごいと思う。最近は機嫌がいいときを見計らってこちょこちょをして笑わせたり、簡単なダンスを教えたりして遊べるようになった。兄も嬉しそうに笑ってくれるので、私も嬉しくなる。しゃべれなくても心を通わせることはできる。兄が困っているときは手助けをして、自分で壁を乗り越えようとしているときには、逆にあまり手を貸さず、本人が充実した生活を送れるようにほどよく介助することが自分の役目だと思えるようになった。

兄との生活や支援学校での交流を通して、私は障害者に対する見方を変えることができ、少し心が成長できたのではないかと思う。兄のような障害者が生きやすい社会を実現するためには、健常者と障害者が交流する機会を増やし、お互いを知り、違いを認めることが最も大切なことだと思うが、たとえそのような機会がなかったとしても、全ての人々が障害の有無に関係なく、自分とは違う相手のありのままを尊重していくことで、心を成長させられるはずだ。そして、その「心の成長」こそが全ての人々が生きやすい、偏見や差別のない社会の実現につながっていくと私は信じている。